

II 特別連載 II

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第273回

2020年初旬以降、新型コロナウイルスの感染拡大の影響による海外からの渡航制限のため、さくらサイエンスプログラムでも招へいが実施できない状況が続いている。科学技術振興機構(JST)では、これまでの交流により醸成された海外の送出し機関と日本の受入れ機関の良好な関係を継続させるため、また新たな交流に向けた準備のために、各機関によるオンラインプログラムへの支援を続けている。今回は2大学(横浜市立大学、九州工業大学)からのレポートを紹介する。

横浜市立大学の活動報告



叶谷 由佳
(横浜市立大学副医学部長、看護学科長、老年看護学教授)

ハサヌデイン大看護学部生と
オンライン交流プログラムの

今年1月19日から21日の3日間、インドネシア・ハサヌデイン大学看護学部生20名と教員5名を、さくらサイエンスプログラムの支援を受けてオンライン交流プログラムに招待いたしました。

横浜市立大学グローバル都市協力研究センターは、国際社会で指導的役割を果たせるグローバル人材育成を目的として設立され、主にアジアの大学間ネットワークであるアカデミックコンソーシアム(IACSC)を中心にアジアの各都市が抱える問題を解決し、地域や世界に貢献することを目指して活動しています。当センター内の公衆衛生ユニットは、公衆衛生に関する問題や課題に取り組んでいます。今回、IACSCのメンバー校であり、兼ねてから交流のあった、ハサヌデイン大学看護学部の学生を招待することにしました。

世界的に共通する人口の高齢化に伴い、摂食嚥下機能低下に付随する健康問題は、日本とインドネシア双方が取り組むべき重要な課



嚥下に関連する筋肉トレーニング方法を実演

題です。そこで、オンライン交流プログラムのメインテーマを、「摂食嚥下の課題と支援」としました。プログラムでは、Zoomを使用し、参加者は全員、自国から参加しました。インドネシアと日本の時差は1時間であり、時間的な問題はほぼありませんでした。プログラム初日では、開学式の後、本学看護学科の教員より、日本の医療システムや摂食嚥下における課題と支援方法を紹介。その後、インドネシアとの違いを参加者全員で話し合いました。

プログラム2日目は、湖山医療福祉グループ特別養護老人ホームラズール金沢文庫から講師を招き、老人保健施設における摂食嚥下支援の実際を話していただきました。オンライン開催に伴い施設訪問が難しかったため、施設紹介動画を作成し、使用しました。

また、横浜なみきリハビリテーション病院からスピーチセラピストを講師として招き、リハビリテーション病院における高齢者の摂食嚥下支援の実際を話していただきました。写真は、嚥下に関連する筋肉トレーニング方法を実演しているところです。この病院についても施設紹介動画を作成し、使用しました。プログラム3日目は、横浜市立大学医学部看護学科2年生(100名)が参加する国際看護学の授業に、ハサヌデイン看護学部も参加しました。両校の学生が参加する合同グループワークにて、グループ毎に与えられた、摂食嚥下支援に関するテーマについて調べ、発表してもらいました。

閉会式では、ハサヌデイン看護学生の皆さんが、日本語でありがとうの文字で挨拶をしてくれました。来年は日本で会いましょう！と固く誓い合いました。

九州工業大学の活動報告

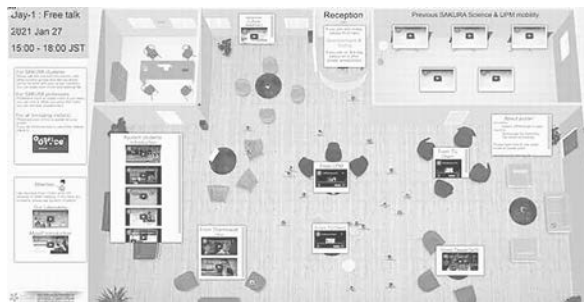


城崎 由紀
(九州工業大学
大学院工学研究院准教授)

医療材料開発研究における 持続可能なネットワーク構築 次世代女性リーダーの育成

本プログラムは2018年度から3年間継続として採択されており、2020年は最終年として各大学とも日本での活動を楽しまにしています。しかし、新型コロナウイルスの拡大により来日制限が解除されず、日本への招聘は不可能な状況になり、オンラインでの開催を試みました。

参加者がログインしているだけという状況を可能な限り作らないようにするには?と考える、どのようなプラットフォームが使用できるかを調べるところから始めました。①使用デバイスの制限が可能な限り少ない②実際に会場にいるような空間作りが可能である③ホスト不在時でも参加者が自由な時間に入出りできる④参加者の動きが全体で把握できる⑤グループワーク可能な閉ざされた空間を設定できる——この5点から、メインのプラットフォームとしてOviceを選択し、今年1月27日から29日まで、マレーシアアトラ大学、



バーチャル会場を用いた初日のフリートーク

国立台湾科技大学、タイ・タマサート大学とオンラインにて交流を行いました。事前準備として1カ月前にZoomにて顔合わせを行い、グループワークの準備を行いました。オンラインあみだくじを利用し、9つのテーマにグループ分けしました。当日まで

にグループメンバーと相談し合えるよう、それぞれで連絡手段の交換も行い当日に備えるようにしました。

初日は、まずZoomを用いたウェビナー形式で、例年通り、各国、各大学、各研究室などを参加学生が紹介しました。今回は新型コロナウイルスに対する自国の取り組みと現状を1つの報告項目として、互いの状況を共有するきっかけとしました。その後、バーチャル会場(Ovice)アバターで自由に会話)に移動し、事前に各自で準備した自己紹介動画や過去のさくらサイエンスの活動動画を視聴したり(個別での動画共有や掲示によるYouTube視聴)、研究室見学をカメラで行ったりしながらフリートークを行い、お互いの交流を深めました。

二日目は、グループごとバーチャルルーム(カメラモードでの同室メンバーのみによる会話、ルーム外に会話は聞こえない、施錠も可能)で、事前に決定していたテーマに関する音声入りポスター作成を行いました。ヘルステア商品入りをテーマとし、それらの歴史や各国での違いや最先端技術等を、専門外の人にも分かりやすく説明する為、時差があつたり、回線が不安定なメンバーがいたりするなか、協力して活動を進めました。しっかりと役割分担し、集中して作業を進める必要があつたので、普段のような現場で直接行う活動よりも活発に会話をしていただけに感じました。

三日目は、作成したポスターをバーチャル会場にて掲示し、公開イベントとしました。各大学関係者を含め、総勢200名を超える来場者があり、バーチャル会場でのポスターや関連動画の視聴や担当学生との会話を楽しんでいただきました。また、来場者によるポスター賞のオンライン投票も行いました。過去のさくらサイエンスで講演いただいた先生には、特別審査員としてポスター審査をお願いしました。

参加前は、バーチャル会場での国際交流がどのように行えるのか、参加メンバーもなかなかイメージが湧かず不安な気持ちで参加したようです。しかし、新しいプラットフォームの使用や音声入りポスターをオンラインで作成する過程においてソフトウェアの利用方法など、多くのことを学べたとの感想が多くありました。また、参加人数に上限がない為、さくらサイエンス同窓生や、オンラインでの交流活動の方法を模索中の各大学事務系の方にも自由に参加いただけたのがよかったのです。2020年度の招聘は延期扱いになったので、来年度は可能であれば通常通り日本での交流活動ができることを願っていますが、バーチャル会場を用いた方法をバージョンアップしながら、今後は高校生等も含めて本交流活動の内容を広げていきたいと考えています。